

家庭での火を扱うお手伝いに関する調査

— 小学校5, 6年生の子どもをもつ母親を対象として —

A Study for Mothers on Chores Dealing with Fire at Home of Japanese 5th and 6th Graders

清水 彩子¹

Ayako SHIMIZU

丸山 智美¹

Satomi MARUYAMA

河原 ゆう子²

Yuko KAWAHARA

伊藤 久敏²

Hisatoshi ITO

キーワード 母親, 小学校5・6年生, 火を扱うお手伝い

緒言

人は文化や火をはじめとする技術の獲得により繁栄したと考えられている¹⁾。火は古来より人の生活に重要な役割を担ってきたと言えるであろう。我々はこれまでに、学校の教員が、火を扱うことを児童に有益な教育であると考えている一方で、「児童が生活で火と接する機会が不足している」、「火の扱いは家庭で教える必要がある」という課題を持っていることを報告した²⁾。また「子どもの調理実習における主体性発揮には、家庭における「火」を扱うお手伝い経験が強く影響する」として、子どものころの火との接点、その後の火の扱いや恐怖と関連する可能性を示した³⁾。これらは子どもが火の扱いを習得するために、家庭内での火を扱うお手伝いが重要であることを示唆している。

女性の就業率は、総務省統計局の労働力調査によると、1985年9月には54.0%であった

が、2011年から60%を超えるようになり、2018年9月には70.3%まで上昇している。働いている女性は働いていない女性と比較して、「夕食を作る回数」、「家族と一緒に夕食を食べる回数」が少なく、フルタイムで働く女性よりパートタイム・アルバイトで働く女性よりこれらの回数が少ない傾向にあると報告されている⁴⁾。また家庭での調理操作は簡便化しており⁵⁾、調理が簡素化している現状では健康的な外食の選択には家庭料理の技術向上が有効であるとする報告⁶⁾もある。学校の教員が課題としている「児童が生活で火と接する機会が不足している」ことは、夕食を作る回数の減少や調理の簡便化・簡素化と関連しているかもしれない。

実際に、小学生では「包丁によるじゃがいもの皮むき」と「ガスレンジの使い方」に不安、苦手意識がある児童が見られ、基礎的な調理技術として、包丁の扱い、ガスレンジの使い方の技能を高める必要性が示されている⁷⁾。

¹ 金城学院大学生生活環境学部

² 東邦ガス株式会社

家庭でのお手伝いの実態については、厚生労働省による「21世紀出生児縦断調査（平成13年出生児）の概況」⁸⁾、金融広報中央委員会による「子どもの暮らしとお金に関する調査」に統計データがあるが、筆者らが調査した限りその他には見当たらず、特に火の扱いを伴うお手伝いの実態を明らかにした調査研究はほとんどない。そこで本研究では、家庭内での火の扱いを伴うお手伝いの実態を明らかにすることを目的に、小学5・6年生の子を持つ母親を対象に、インターネットによるアンケート調査を実施した。

方法

対象者は、東海3県在住で、小学5年生もしくは6年生の子をもつ30歳代から50歳代の母親218人とした。調査は株式会社オージス総研に委託し、「家庭における火の接触機会に関する調査研究」のモニターのうち回答のあった者を対象者とした。調査方法はインターネットを用いたアンケートシステムで、2017年3月7日から14日の8日間で調査を実施した。当該学年の子どもについての回答を得た。該当学年の子を複数持つ場合には学齢が上の子どもについて回答してもらった。

調査項目は、回答した母親の属性として、年齢、職業、学歴、同居家族、同居の子どもの人数、本調査の回答に該当する子どもの性別を、項目から選択させた。子どもにさせているお手伝いとして配膳、食材を包丁で切る、皮をむく、火を使わない調理、コンロを使って加熱料理をする、食器洗い、洗濯機をセットしてまわす、洗濯物を干す、洗濯物を乾燥機に入れる、洗濯物を取り入れる、洗濯物をたたむ、洗濯物を指定の位置にしまう、掃除機やワイパーをかける、トイレ掃除、お風呂掃除、玄関の靴並べ・掃除、ごみ出し、ポストに新聞や郵便物などを取りに行く、上記の

お手伝いはどれもさせていないの18項目から、当てはまるものすべてを選択させた。お手伝いの内容を単純集計した。さらにお手伝いの内容と子どもの性、およびお手伝いの内容とカテゴリを結合し専業主婦および無職と回答した群とそれ以外の2群に分けた対象者の就業との連関性および長子と二子・三子との連関性についてカイ2乗検定もしくはフィッシャーの直接確率検定で解析した。本研究は、金城学院大学倫理審査委員会の承認（H16012）を得て実施した。

結果

対象者218人の属性を表1に示す。平均年

表1 母親の属性

年齢（歳）	42.1±4.1
配偶者	
あり	207 (94.5)
なし	12 (5.5)
職業	
専業主婦	103 (47.2)
パート・アルバイト	80 (36.7)
正社員など*	34 (15.6)
無職	1 (0.5)
学歴	
大学院修了	2 (0.9)
四年制大学卒業	62 (28.4)
短期大学卒業	63 (28.9)
専門学校卒業	23 (10.6)
高等学校卒業	61 (28.0)
わからない・答えたくない	3 (1.4)
親との同居	
あり	26 (11.9)
なし	192 (88.1)
同居の子どもの人数	
1人	42 (19.3)
2人	123 (56.4)
3人	41 (18.8)
4人以上	12 (5.5)
当該の子どもの性別	
男	101 (46.3)
女	117 (53.8)

表中の値は平均値±標準偏差または度数（％）

* 正社員、会社役員、公務員、専門職、自営業

年齢（±標準偏差）は42.1（±4.1）歳で最少年齢が31歳で最大年齢が54歳，専業主婦は103人（47.2%），パート・アルバイトが80人（36.7%），正社員・会社役員・公務員・専門職・自営業は34人（15.6%）で，無職は1人（0.5%）であった。学歴は，短期大学卒業が最も多く63人（28.9%），次いで4年生大学卒業が62人（28.4%），高等学校卒業が61人（28.0%），専門学校卒業が23人（10.6%）であり，大学院修了の回答は2人（0.9%），わからない・答えたくないは3人（1.4%）であった。同居家族に対象者本人もしくは配偶者の父母・祖父母がいる者は26人（11.9%）であった。同居の子どもの人数の平均（±標準偏差）は2.1（±0.9）人で，1人が42人（19.3%），2人が123人（56.4%），3人が41

人（18.9%），4人以上が12人（5.5%）で，当該の子どもの性は男子101人（46.3%），女子117人（53.8%）であった。

子どもにさせているお手伝いの結果を表2に示す。子どもにさせているお手伝いで最も割合が高かったのは配膳で156人（71.6%），次いで洗濯物をたたむ89人（40.8%），食材を包丁で切るとお風呂掃除がともに88人（40.4%）であった。30%を超える回答があったのは，ポストに新聞や郵便物などを取りに行くが85人（39.0%），火を使わない調理が83人（38.1%），コンロを使って加熱調理するが72人（33.0%）であった。お手伝いはどれもさせていないと回答した者は一人もいなかった。男女差は配膳とごみ出しで有意であり，母親は女子に配膳を，男子にごみ出しの

表2 子どもにさせているお手伝い

	全対象者 (n=218)	子どもの性		p値*
		男子 (n=101)	女子 (n=117)	
配膳	156 (71.6)	65 (64.4)	91 (77.8)	<0.05
食材を包丁で切る・皮をむく	88 (40.4)	35 (34.7)	53 (77.9)	0.110
火を使わない調理	83 (38.1)	35 (34.7)	48 (70.6)	0.334
コンロを使って加熱調理する	72 (33.0)	31 (30.7)	41 (60.3)	0.496
食器洗い	65 (29.8)	29 (28.7)	36 (52.9)	0.741
洗濯機をセットしてまわす	18 (8.3)	5 (5.0)	13 (19.1)	0.099
洗濯物を干す	36 (16.5)	14 (13.9)	22 (32.4)	0.327
洗濯物を乾燥機に入れる	7 (3.2)	5 (5.0)	2 (2.9)	0.176
洗濯物を取り入れる	61 (28.0)	22 (21.8)	39 (57.4)	0.058
洗濯物をたたむ	89 (40.8)	35 (34.7)	54 (79.4)	0.085
洗濯物を指定の位置にしまう	56 (25.7)	20 (19.8)	36 (52.9)	0.065
掃除機やワイパーをかける	44 (20.2)	24 (23.8)	20 (29.4)	0.221
トイレ掃除	14 (6.4)	5 (5.0)	9 (13.2)	0.410
お風呂掃除	88 (40.4)	47 (46.5)	41 (60.3)	0.085
玄関の靴並べ・掃除	54 (24.8)	27 (26.7)	27 (39.7)	0.533
ごみ出し	66 (30.3)	38 (37.6)	28 (41.2)	<0.05
ポストに新聞や郵便物などを取りに行く	85 (39.0)	42 (41.6)	43 (63.2)	0.466
上記のお手伝いはどれもさせていない**	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	

表中の値はn（%）

*カイ2乗検定による（両側検定）。期待度数が5に満たない場合にはフィッシャーの直接率検定による（両側検定）。

**人数がいずれも0で統計量は計算されないため空欄。

お手伝いをさせていた。母親の就業の有無と長子と二子・三子ではいずれも統計学的に有意な項目を認めず、母親の就業や長子は子どもにさせているお手伝いに連関していなかった。

考察

本研究では、小学生の家庭内での火の扱いを伴うお手伝いの実態を明らかにすることを目的に、小学5年生と6年生の子を持つ母親を対象に、当該学年の子どもにさせているお手伝いについて、インターネットによるアンケート調査を行った。インターネットを用いた調査では、目標母集団と実際に使用している母集団フレームとの誤差であるカバレッジ誤差が大きいことが課題として挙げられている⁹⁾。そのため、まず本研究の調査対象者の集団特性について論じる。本研究の対象者は専業主婦・無職が47.2%で、「平成27年国勢調査結果」¹⁰⁾の30歳から59歳の女性の労働力率平均の74.2%と比較すると、経済活動に参加する職業に就いていない者の割合が高い集団であった。また最終学歴は短期大学・専門学校・大学・大学院卒業の割合は68.8%であり、「平成24年就業構造基本調査結果」の30歳以上60歳未満に示される高等学校卒業が42.0%、短期大学・高等専門学校卒業が26.4%、大学・大学院卒業が14.0%と比較すると、長い学歴を有する者の割合が高かった。当該の子どもの父母兄弟姉妹以外に同居家族がいる割合は5.9%で、単独世帯27.0%を含めて三世帯世帯が5.8%であった「国民生活基礎調査の概況」と比較すると核家族の割合が高かった。同居の子どもの数は、2.1人で、子どものいる世帯の平均子ども数は、「国民生活基礎調査の概況」の児童がいる世帯での結果である1人が44.3%、2人が42.1%、3人以上が13.6%と比較すると一人子が少ない傾

向にあった。すなわち本研究の対象集団は、わが国の30歳から60歳の対象者と同年齢層と比較すると、専業主婦で、短期大学卒業以上の長い学歴を有し、核家族であり2人以上の子どもがいる者の割合が高い特性をもつ集団であった。

子どもにさせているお手伝いで40%を超える回答があった項目は配膳、洗濯物をたたむ、食材を包丁で切る、お風呂掃除であった。30%を超える回答があったのは、ポストに新聞や郵便物などを取りに行く、火を使わない調理、コンロを使って加熱調理するであった。火を扱うお手伝いは、「コンロを使って加熱調理する」と回答した33.0%であった。「21世紀出生児縦断調査の概況」⁸⁾では、「部屋やお風呂などの掃除をする」割合が50.2%と最も高く、次いで「お米をといたり、料理を作るのを手伝う」が38.4%、「洗たく物を干したり、たたむ」が35.8%、「ゴミを出す」32.6%と続いていた。この調査では、火を扱うお手伝いとして調理を独立させた調査項目としていないため、「料理を作るのを手伝う」中に火を扱う加熱調理が含まれるかは明確ではない。しかし本研究の調査結果とお手伝いの内容が似ていることから、火を扱うお手伝いは本研究と同じ程度の割合であることが推測される。

お手伝いの男女差は、本研究では女子の母親は配膳を、男子の母親はごみ出しをさせる割合が高かった。「21世紀出生児縦断調査の概況」⁸⁾では、男児は「部屋やお風呂などの掃除をする」「ゴミを出す」、女児は「部屋やお風呂などの掃除をする」が多かったことが報告され、異なる傾向もあったものの、子どもの性によりお手伝いの内容が異なる可能性が示唆された。しかし男女差があったお手伝いはいずれも火を扱うお手伝いではなかったため、火を扱うお手伝いの男女差については

言及できない。

母の就業の有無別に検討した結果，お手伝いのすべての項目において差がなかった。有職81.6%（男児79.8%，女児83.6%），無職79.2%（男児78.0%，女児80.4%）と2.4ポイントの差がみられたと報告されている⁸⁾が，統計学的な差を示したものではない。また子どものお手伝いに関しては，母親は「家庭内においては，どちらかといえば，勉強に比重が置かれ，生活面の手伝いについては，無理に手伝いをさせようと思っておらず，容易に手伝えることを手伝わせている」ことや家庭教育への責任を果たすために，働き方を調整しているケースも見られたことが報告されており¹¹⁾，母親の就業への意識や働き方などの要因が子どものお手伝いの項目等に影響していると考えられる。本結果では，火を扱うお手伝いが母親の就業と関連しているかを示すことはできなかった。今後，母親の就業の有無が子どものお手伝いと関連するかは，母親の就業意識や条件等を含む詳細な調査を踏まえて検討する必要がある。

長子と二子・三子では，お手伝いのすべての項目において差がなかった。お手伝いは，出生順位による性格¹²⁾には関連しない可能性が示されたが，この点を言及するにはさらに詳細な調査が必要である。

本研究にはいくつかの限界がある。まず「母親がさせているお手伝い」という質問項目を解析しており，調査項目が子どものしているお手伝いと一致しているの信頼性と妥当性を検証していないことが限界点として挙げられる。また対象者集団が，専業主婦で，短期大学卒業以上の長い学歴を有し，核家族であり2人以上の子どもがいる者の割合が高い特性をもつ218人であった。本研究の対象者の学歴，世帯種別，就業率等は，わが国の平均的な小学生の子をもつ母親と同じ属性であっ

たとは言えず，結果を一般化するには，解釈に注意を要する。

小学校5年生と6年生の子どもをもつ母親を対象とした本研究では，家庭において火を扱うお手伝いを経験している子どもは3割強であったという結果を得た。火の扱いを家庭でのお手伝いで習得する機会が少ない現状が推測できる。他方，学校での教育を行う教員は，火の扱い方を家庭で教える必要があると考えている²⁾。これらは現代の子どもが火の扱いを学ぶ機会は家庭で少ないにも関わらず，学校では火の扱いを家庭で教育してほしいという相矛盾する実態を示している。現代の子どもが火の扱いを学ぶためには，家庭や学校の教育以外に方法が必要であると考えられる。

本研究は，東邦ガス株式会社の共同研究費により実施した。

参考文献

- 1) 山口由二. 人類史にみる環境問題：人類はどのように環境変動に適応してきたか，環境創造 9, 43-53, 2006
- 2) 丸山智美，清水彩子，河原ゆう子，伊藤久敏. 小学校教員は，児童が火を扱うことを有益な教育であると考えている. 日本家政学会第70回大会，2018
- 3) 河原ゆう子，伊藤久敏，丸山智美，清水彩子. 子どもの調理実習における主体性発揮には，家庭における「火」を扱うお手伝い経験が強く影響する. 日本家政学会第70回大会，2018
- 4) 石田貴士，西山未真，丸山敦史. 女性の就業形態が食生活に与える影響. 食と緑の科学 69, 17-23, 2015
- 5) 豊満美峰子，小川久恵，松本伸子. 家庭における調理操作の実態. 一般社団法人日本家政学会研究発表要旨集 55(0), 134-134, 2003
- 6) 小住フミ子，上村和子. 家庭の調理簡便化とその周辺III：志布志町におけるアンケート調査. 鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報30, 1-12, 2000
- 7) 渡瀬典子，長澤由喜子，菊地尚子，川越浩子，

- 羽澤美紀. 小学生の献立作成力・調理技術力をどう捉えるか--1985年調査との比較をもとに. 岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 9, 1-8, 2010
- 8) 厚生労働省. 第12回21世紀出生児縦断調査(平成13年出生児)の概況
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/12/index.html> (2019年3月7日アクセス)
- 9) 本多則恵. 社会調査へのインターネット調査の導入をめぐる論点—比較実験調査の結果から—. 労働統計調査月報57, 12-21, 2005
- 10) 総務省統計局. 「平成27年国勢調査結果」. II労働力人口 p7. <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2015/kekka/kihon2/pdf/gaiyou.pdf> (2019年3月13日アクセス)
- 11) 片桐真弓. 家庭教育の現在と母親たち. 尚絅大学研究紀要人文・社会科学編45, 1-20. 2013
- 12) 金山富貴子, 笹山郁生. 「きょうだい型」ステレオタイプの検討. 福岡教育大学紀要. 第四分冊, 教職科編 46, 209-220, 1997